

増補 大江山

戻り橋の段

それ普天ふてんの下卒土そつとの浜ひん、王土おうどにあらぬ処ところなきにいづくに妖魔の住みけるか。去んぬる頃より洛中へ、悪鬼現れ人を取り、夜は往ゆき来きの人もなし。春雨もいつしか晴れて、白々と月照り亘る掘川の、早瀬の流れ落ち合ひて、水音すいご凄すこき戻り橋
さても渡辺わたなべのげんごつな源吾綱は、戻り橋へ来たりしが

「四方はひつそり静まりて、怪しと思ふ者もなく、無駄足踏みし残念」

と、ひとり吟つぶやき橋のこなたに立ちあたる

折りふし『サツ』と吹き嵐あらしす風かあらぬか、岸の柳の騒がしく、心ならねば振り返り

「ハテ心得ぬ。いま吹き嵐す夜風の、身にしみじみと五体の熱気。さては妖魔の仕業にて、我を脅さん巧みよな、たとへ如何なる妖魔の術あるとも、それを恐るゝ

綱にあらず。いで妖怪を退治して、君へ土産に参らせん。イザ来い来たれ」

と太刀引きそばめ、木この下蔭へと忍び居る

また群立むらちし雨雲の、影洩もる月をよすがにて、辿たどる大路に人影も、火影ほかげも見えず我が影を、もしや人かと驚きて、被衣かっぎに身をば忍ぶ摺ずり、狭布きょうの細布ならずして、女心に胸合はず思ひ悩みて来たりける

「今宵の空の定めなく、降らぬうちにと思へども、こゝは一条戻り橋。見れば往

き交ふ人もなし、ア、頼りもなや」

と佇^{たたず}みて、暫し休らひたりける

「ア、イヤ女性^{にょしやう}はいづれへ参らるゝぞ」

「オ、これはくお武家様。わらはは一条の大宮より、五条の辺り^{あた}へ今宵のうち、

ぜひ参らねばならぬ者。が女子の身でたゞひとり、この物騒な夜の道、怖いく

と思ふうち、今のあなたのお声にてほんに吃驚致しました。」

「ホ、怖いと申すは尤^{もつと}もなり。五条の辺りへ参るとあらば、ア、幸ひのよき道連

れ。五条の辺りへ用事もあらば、某^{それがし}送つてつかわさう」

「コハお情け深いその仰せ。お詞に従ひますればどうぞお連れなされて下さりま

せ」

「いざ参らう」

と打連れ立つ、折しも空の雲晴れて

月にありく小川の流れ、水に映りし異形の姿綱は目早く

「ム、いま水中に映りし影は」

「エ、」

「ア、イヤ夜更けぬうちに、はやとくく」

と西へ廻^{まわ}りし

月の輪に

遠く

離れて愛宕山

北野は近く

清滝の

森はこなたと

振り

返り

見上ぐる顔に

はら

はらと

木々の雫も雲運ぶ

『またも雨か』と立休らひ

綱は女を労りて

「歩み馴れぬ夜道にてさぞ草臥れしことならん」

「イエ／＼わらはよりはあなたはあなこそ、足弱をお連れなされまして、定めしお草臥

れござりませう」

「ナニサ／＼、最前より見受けしところ、ハテ艶あでやかなおことが姿」

連れ立つ道に馴れやすく、今は隔てもなかな空おぼろの朧も春の名残とや

「都人とはいひながらいとも優なりしき形風俗、異なことを尋ぬれども、御身が父は何びとなるぞ」

「ハイお尋ねに預りお答へ申すも面映く、父は五条の扇折り、常々舞を好みし故、わらはも幼き頃よりも教へを受けしが身の徳にて、このほどもある御所にお宮仕へを致しました」

「ホ、さもあらん／＼、恥づかしながら某は、いまだ舞を見たることなし。ひと差し舞を見せられまいか」

「お送り下さるそのお礼に、只今ご覧に入れませう、が何を申すも途中のこと、

拙つたなき業わざとお叱りはたゞ幾重にも」

と一礼し、女性は扇借り受けて、会釈をこぼし進み出る

空も霞みて八重一重、桜狩りする諸人もろびとが、群れつゝこゝへ清水きよみずや、初瀬の山に行きと見し、花の散りゆく嵐山惜しむ別れの、春過ぎて、夏の初めにおくれにし、花も青葉に衣替へ、木々の緑の美しや

「テサテ面白きことなりしぞ。斯かかる伎芸のある者を妻に持ちなばよき楽しみ、春の夜道に結ぶ縁、解くか解かぬはおことが心只一つ。コレサどうか／＼」

と寄り添へば

女は『ハツ』と袖覆ひ

「お戯れとは知りながら、嘘にも嬉しいその仰せ。定めてあなたは奥様をお持ち
なされてござりませう」

「ア、イヤ／＼いまだ妻は娶らぬ、が見らるゝとほりの武骨者、誰も妻にはなり
人がない」

「なんのマアないことがござりませう。まざまざとしたそのお詞、お情け深きお
心に今宵まみえしわらはさへ、縁を結ぶ露もがな。思ふ恋路の初蛩、言ひ出しか
ねて胸焦がし若葉の闇に迷ふもの、都女郎は取り分けて、姿優しき花菖蒲、引き
つ引かれつ沢水に袖も濡れにしことならん」

こなたはなほも打解けて

「それは御身の思ひ違ひ。斯かる名もなき田舎武士、思ひを掛ける者があらうか」

「イエ／＼知つてをります立派なお名前」

「何立派な名前とは」

「当時に裏を警衛に、都へ上りし源頼光朝臣の身内にて、渡辺源吾綱殿故」

「ム、いかゞ致して我が名をば」

「サア恋しと思ふ殿御故、とくより存じてをりまする」

「恋しく思ふと言ふは偽り、御身が我が名を存ぜしは妖魔の術であらうがな」

「オホ、、また吃驚ささうと思ふてアノマア真顔で。コレ申しご覧のとほり私
は若菜」

「テへ、、白々しくもぬかしたりな。汝は心付かざりしが、最前これへ来たる
道筋、月の光にありくと水に映りし鬼形の姿」

「なんと」

「ハ、、。見目よき女おんなに化すとも、その本性は悪鬼ならん」

「ム、」

「サア斯く見抜きし上からは、その本性を顕はすか」

「サア」

「君より賜はるこの御太刀み、髭切丸ひげきりまるの利剣の切れ味すみやかに降伏こうふくささうか」

「サア」

「サアくくくく源頼光が家臣、渡辺源吾綱が迎ふたり。変化の正体顕せよ」
と、柄に手を掛け詰めかけたり

こなたの妖女たちまは忽たちまちに、憤怒ふんぬの相を顕して、次第々々いくなに変ずる姿、眼怒いからし大音声
「我は愛宕の山奥に、幾年住みし悪鬼なり。斯く見顕されし上からは、我が隠れ
家がへ連れ行きて引き裂きくれん、いざ来い」

と、言ふより早く飛び掛かり、綱が襟髪えりがみむんずと掴み、引つ立て行かんその有様

「ナニ小癩こしやくなり」

と振り放すを

まとも掴つかみし強魔の力

こなたは動かぬ金剛力

引きつ

引かるゝ

時しもあれ

一天にわか俄にかき曇り震動なして四方しほうより、黒雲覆ひ重りて、砂石しゃせきを飛ばす暴風に、連

れて虚空へ

引き上ぐれば

妖しかりける